令和３年度 第４回
とみやわくわくミーティング
実施報告書

富谷市総務部市民協働課

実施状況

テ　ー　マ	田園都市構想について ～住みたくなるまち日本一を目指して～
日　　時	令和３年１２月２１日（火）午後２時５０分～午後４時５０分
場　　所	西成田コミュニティセンター
ア ド バ イ ザ ー	宮城大学　副学長　風見　正三　氏
ファシリテーター	宮城大学　事業構想学群　准教授　佐々木　秀之　氏
参　加　者	一般参加　　１０名 富谷市　　８名（市長、総務部長、企画政策課長、市民協働課４名、企画政策課１名） 傍聴者　　３名

時間	内容	状況写真
14:50～ 15:10	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ ①自己紹介 ②集合写真	
15:15～ 16:50	ミーティング ①市長あいさつ ②ﾐｰﾃｨﾝｸﾞﾚｸﾁｬｰ ③情報提供 （企画政策課） ④講話 ⑤意見交換 ⑥市長感想	

市長あいさつ

皆さん、こんにちは。本日はもう年の瀬、あと１０日で今年も終わろうとしている大変お忙しいところ、第４回とみやわくわくミーティングに皆さんにご参加いただきまして本当にありがとうございます。このわくわくミーティングにつきましては、これまでも色々な機会にお話させていただいておりますが、市民の皆さんの声を市政に反映させるためにということで、毎回それぞれのテーマを設定いたしまして、テーマに基づいて色々なご意見をいただく場として開催してきたところでございます。そして今回は、テーマが「田園都市構想について」ということで、この後、今日は大変お忙しい中、宮城大学副学長の風見先生にご講話をいただきます。富谷は平成２８年１０月１０日に市制施行いたしましたが、実はその１０日後に風見先生から「明日への田園都市への誘(いざな)い」という本をいただきました。皆さんご存知のとおり、市制施行を迎える時に、市になることが目的ではなくて、大切なのはどんな市をつくるかだということで、市民の方にアンケートや座談会など色々な機会を設けて総合計画を策定させていただきました。住みたくなるまち日本一という方針を目指して、様々な施策を盛り込んで総合計画を策定させていただいたところです。昨年度前期計画が終わり、今年度から後期計画がスタートしたところでございますが、当初、住みたくなるまち日本一というテーマに基づいて色々な施策に取り組んできた中で、まずは今年、民間機関が公表した住みよさランキングだったり、住みここちランキング、または住み続けたいまちランキングにおいて、お陰様で富谷市は県内一位や東北一位という高い評価をいただくことができました。ただ、私たちは日本一を目指しているということで、いつもさらに努力をしていきたいということでお話させていただいているのですけれども、この住みたくなるまち日本一という言葉が、具体的にどのようなイメージなのかというのを、皆さんともっと具体的に共有できるような都市の将来像を描けないだろうかと考えていたところに、ちょうど風見先生からいただいた本の田園都市構想と結びつき、今日も成田の方がいらっしゃいますけれども、富谷にはガーデンシティもありますし、そして今日、自然豊かな旧西成田小学校があったところで開催させていただいておりますが、このような自然豊かな環境に恵まれた富谷の目指すところは、田園都市というのが将来の方向性として描けるのではないかと。風見先生が３０年前に田園都市構想を学ぶためにロンドンへ留学されて勉強して、２０年前にこの本を執筆されたところでございますが、この時に私はもし田園都市構想が富谷の未来を築けるのであればと思っていたところでした。実は今回、総合計画、後期計画の中に新たな視点という三つの視点の中に、一つはウィズコロナ、アフターコロナ、二つ目に子どもにやさしいまちづくり、これは日本ユニセフ協会から全国で五つの検証自治体の一つとして位置づけられて検証作業を行ってきたのですけれども、ちょうど昨日、正式に日本型子どもにやさしいまちづくり実践自治体として承認をいただいたところでございます。そして三つ目が SDGs というテーマに基づいて、資料の５ページの下に記載されているのが、将来に向けて田園都市構想というのを後期計画の中に初めて表現をさせていただいたところでしたが、このたび、岸田総理が、新しい政権が発足した時にデジタル田園都市国家構想を打ち出したところでございまして、そういう意味ではまさに富谷の目指すところに今後の日本の

あり方も含めて、もし将来を描けるのであればと思っているところでございます。

西成田小学校は、私の母校でありまして、先ほど参加者の方からもここを卒業したとのお話がありましたが、私は卒業していなくて、５年生、６年生は富谷小学校と統合したものですから、４年生までここで学ばせていただきました。私の同級生は男６人、女６人、当時全校生徒８０人位、今では考えられないですけれども。富谷では初めてこの学校が統合により廃校になったということでございますが、ただその後に西成田コミュニティ推進協議会の皆さんが大切に守り、そして西成田コミュニティセンターとして地域の方に守っていただいたおかげで、今もこうやって里山の豊かなこの地形豊かな環境の中に残っていたのが、西成田コミュニティセンター、旧西成田小学校でございます。皆さんご存知の方もいると思いますけれども、豊かな環境を何とかもっと生かしたいということで、来年の春からはこの学校を、東北で初めて文部科学省の指定を受け、不登校特例校として、中学１年、２年、３年の子どもたちが集まって、一歩踏み出す場として、新たなスタートをすることにもなっております。そういったことで、今日は皆さんから田園都市構想に向けて、色々なご意見をいただけることを大変楽しみにしておりますので、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。色々な思いがありまして、若干長くなってしまいまして申し訳ございません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ミーティングレクチャー（ファシリテーター）

皆さんよろしくお願いいたします。ご紹介いただきました宮城大学の佐々木です。わくわくミーティングでは座長を務めさせていただいております。本日は風見先生にアドバイザーとして講話をお願いしておりますので、私の役割はファシリテーションとさせていただければと思います。このわくわくミーティングは、皆さんが発言しやすいような環境づくりに努めてまいりました。本日も忌憚なくお話しいただければと思います。

今回のテーマは、「田園都市構想について」です。先ほど、市長より、富谷市と田園都市に関する、これまでの経緯を紹介していただきました。富谷は急速に開発が進んだまちですが、豊かな田園の景観も有しています。そして、ここから車で１５分位のところに宮城大学が立地しており、そこに田園都市研究を進められてきた風見先生がいるということ。風見先生は、イギリスに３年間の留学経験もあるとのことです。本日は、時を経て、まさに二つの軸が折り重なるようなイメージを抱いております。富谷市では、総合計画に田園都市構想を盛り込むべく、総合計画の中期見直しの際、環境と田園都市構想を改めて追記したところです。また、国も同じことを考えていたということで、国のほうは DX という言葉を冠に付して、田園都市構想を進めていくという考え方です。そのような中、市民の皆様からも田園都市をきちんと知っておきたいという声が多く寄せられたということです。

本日も新型コロナウイルス感染症対策の中での実施となりますので、限られた時間となります。まず、市役所より本日のテーマに関する情報を提供していただいた上で、そもそも田園都市とは何かということを風見先生にお話いただき、ご参加の皆さんとの意見交換を進めていきたいと思います。もちろん、この田園都市構想は、今日だけで学びつくせるものではありませんので、今日は、まず導入編という位置づけにさせていただきたいと思います。

それでは、まず市役所企画政策課より、現在、富谷市総合計画にどのような形で田園都市構想が基本計画の中に盛り込まれて、今後どのように改正されていくかという展望、そしてまた国が示しているデジタル田園都市国家構想というのはどのようなものなのかということを５分以内で説明していただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

情報提供（企画政策課）　～別紙「富谷市総合計画後期基本計画ダイジェスト版」及び「令和３年度第４回とみやわくわくミーティング資料」に基づき説明～

今、佐々木先生からありましたように、総合計画の後期計画にどのように田園都市が位置づけられているかというところを簡単にご説明させていただきます。皆さんにお渡しさせていただきました富谷市総合計画後期基本計画のダイジェスト版の冊子があるかと思います。そちらの２ページをお開きください。まず富谷市の総合計画と言いますと、基本構想に住みたくなるまち日本一を将来像に掲げて、平成２８年度に策定いたしました。続いて３ページをお開きください。こちらの基本構想は１０年間ということで、令和７年度までの期間となっています。先ほど市長のお話にありましたとおり、昨年度で基本計画の前期の５年間が終了いたしまして、今年度からは後期の５年間の初年度を迎えている

ところでございます。昨年度、この５年間を振り返って新たに出てきたものということで紹介がありましたように、コロナですとか、ユニセフの子どもにやさしいまちということで、５ページになりますが、SDGs の推進の中で環境、経済、社会というところの三つの軸がウエディングケーキモデルなどとよく言われている部分がありますけれども、環境が土台になってこそ社会や経済が発展していって、持続可能なまちになっていくのだというようなことが SDGs の中でうたわれております。それを富谷市に置き換えてみますと、先ほど市長の話にあったように、やはり自然環境、豊かな田園地帯がありながら、南のほうでは都市の開発がされており、ちょうどこの田園都市という構想に一致するのではないかということで、この５ページの下段の部分を色塗りしてありますけれども、こちらの後段のところで最後に、田園都市構想に向けた検討を進めて、社会生活と自然の調和が図れるまち、持続可能なまちづくりを進めてまいりますということで後期計画の中からうたっております。この５年だけではなくて、その先の長期的なビジョンを持って、田園都市構想というものを勉強していきたいと考えております。

国では先ほどありましたもう一枚の Ａ４のカラーのプリントになりますけれども、デジタル田園都市国家構想というものが掲げられました。こちらの資料は１１月にありました内閣官房のデジタル田園都市国家構想実現会議の中での牧島かれんデジタル大臣が作ったものを抜粋しています。こちらの会議の中ではまだデジタル田園都市国家構想はこういうものだというものが打ち出されておりませんけれども、デジタル大臣の資料の中で何となく概要が読み取れるかと思いお付けしております。国では地方の魅力をそのままに、都市に負けない利便性と可能性をデジタルを活用しながらつくっていくと。それを国全体として田園都市国家ということで目指していくというような中身になっております。

今日につきましては、富谷市らしい田園都市というのがどういったものになるのかというところを皆さんのイメージを我々も共有していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

講話（アドバイザー）

皆さんこんにちは。宮城大学の風見です。私は、東北に来て約 14 年になります。本日は、私のもうひとつの故郷でもあるイギリスのお話をさせていただきたいと思います。私は、まちづくりを仕事にしていますが、どのような仕事もこの会の名前のように「わくわく」と楽しくやることが重要であると考えています。本日も、お忙しい中、こうしてたくさんの方々にお集まりいただきました。皆さん、様々な学びをされていることと思いますが、それは大変素晴らしいことだと思います。人生とは、「自分の軸」と「社会の軸」が「縦糸」と「横糸」で織りなすようなものであり、まちづくりも様々な出会いによって物語が生まれていくようなものです。本日も、こうした新たな出会いから、富谷の未来につながる物語が生まれていくことを願っております。

本日は、「田園都市構想から発する富谷の未来創造」というテーマで講演をさせていただきました後、皆様と議論ができればと思っております。私は、大学生の時に「田園都市」の概念と出会い、この素晴

らしいアイデアに魅了されました。「田園都市論」が発表されてから 100 年以上経つわけですが、未だに正しい評価がなされておらず、その解説書を書こうと思い立ち、約 20 年をかけて達成したものが「『明日の田園都市』への誘い」という著書になります。日本で「田園都市構想」が注目されたのは、大平内閣の時ですが、地方の時代に向けた潮流がその後も続き、岸田政権は、そこに「デジタル」という要素を付加し、「デジタル田園都市国家」という構想を打ち出しました。これからは、「田園都市」をどこに創造していくかが大きな議論になってきます。富谷市は、素晴らしい自然環境を有しておりますので、21 世紀型の「田園都市」のモデルを目指して、大きなチャレンジしていただきたいと思っています。

私は、大学で建築、都市計画を学び、その後、英国のロンドン大学大学院で経営学を学びました。その後、シンクタンクや総合建設会社で様々な仕事をしてきましたが、一貫して、地域主体による持続可能なまちづくりを専門としてきました。私の生家は、農業を営んでおり、地産地消で育ちました。しかし、若い頃は田園の素晴らしさを理解しておらず、その後、都会に住みながら、英国留学する機会を得ました。私は、英国の美しさに目を奪われました。ロンドンは、美しい田園を残しながら都市を計画するというエベネザー・ハワードの思想を実現していました。留学後に日本に帰国し、「田園都市」のような持続可能な都市モデルを実現したいと思い、東京工業大学にて博士号を取得し、2008 年に宮城大学に着任しました。東北は素晴らしい自然に恵まれており、東北であれば、「田園都市」が実現できると実感しながら、今日に至るまで、様々な地域で持続可能なまちづくりを実践してきました。本日は、この「田園都市」を理解するために、まずは、「都市」とは何かということからお話をさせていただくことにします。私が大学の講義で使用しているスライドの一部を持ってきましたので、宮城大学に入学したつもりで、一緒にお付き合いいただければと思います。

皆さんは「都市」とは何だと思いますか。都市というのは、我々が日常で住んでいる一番身近なものですが、その本質を考えることはあまりないと思います。「農村」についても同じかと思います。こうした「都市と農村」の起源や概念を学びながら、「持続可能な都市」とは何か、「富谷」において「田園都市」をいかに創造していくのかについてお話をさせていただきたいと思います。この写真はどこの都市かわかる方はおられますか。この風景は古代ローマです。もちろん、これは、復元模型ですが、あまりに良くできているので、写真のようですね。この写真をご覧になってわかりますように、ローマはこの時代から百万都市でした。「都市」というものは大変古くから存在しており、その起源は、紀元前三千年頃、古代メソポタミアのチグリス・ユーフラテスの河岸に最初の農村集落が発生したと言われています。その後、エジプトやインド、中国等に都市が誕生し、都市という生活様式が発展してきました。そうした歴史の中で、古代ローマは都市の原型として話題にされます。古代ローマは、日本でいうならば、東京のような巨大都市に発展しました。古代ローマでは、その当時から、現代、直面している殆どの都市問題が既に存在していたと言われています。都市は、自然の資源を使うことによって発展していくものであり、都市の発展は自然を破壊することにもなり、自然と共生しない都市は衰退していきます。古代文明の多くが衰退してきたのは、こうした自然破壊から生じており、豊かな森が失われ、人間も住めない環境を生み出してしまいました。ギリシャのアテネは、現在、樹木も少ない都市となっていますが、かつては、もっと緑が豊かな都市でした。我々にとって、都市生活と自然環境をいか

に融合させていくことができるのかは重大な命題でした。我々は、古代都市の発展と衰退の歴史から多くを学び、都市のあり方を模索していく必要があります。「田園都市」は、こうした理想都市の追求から生まれた、都市の未来を創造するモデルなのです。

都市の発展過程について、改めて、お話をしておきますと、農耕文化から都市文明が起きてきました。農村集落が都市の起源であり、その後、産業革命が起きてきます。都市は工業化し、産業の拠点となり、商業も集中していくことになり、現在の都市の原型ができていきます。産業革命によって、都市に工場が立ち並び、商業地が形成され、交通の要所となっていきますが、このことにより、同時に、環境問題も発生していきます。皆様もご存知のとおり、20 世紀は環境問題が深刻化した時代でした。急激な工業化は、都市の自然環境を破壊し、様々な環境汚染も顕著になり、水俣病のような公害病を生み出しました。都市は過密化し、大都市では、ヒートアイランド現象や都市の集中豪雨が発生し、都市のあり方に疑問を呈しました。また、都市の経済成長が加速する中で、都市と地方の賃金格差や雇用格差が生まれました。都市には、人口が集中し、都市は大変賑やかになりましたが、その一方で、農村は過疎が進み、自然が荒廃していきました。こうした社会背景を踏まえて、都市と地方の格差を是正していくために、大平内閣の「田園都国家」の構想をはじめとする様々な地方創生の政策が立案されてきました。政府の地方創生の政策の起点となるものとして、「全総」と呼ばれる「全国総合開発計画」が立案されてきています。これは、「一全総」「二全総」「三全総」「四全総」と長年にわたって策定されてきましたが、当初は、工業立地の地方展開が中心となっていました。全国に産業を立地させ、地方を豊かにする計画でした。日本は、戦争から立ち上がり、まずは、経済的に豊かにならなければならない時代でした。そして、こうした工業化の思想は必ずしも地方を豊かにしたとはいえず、やがて、生活の拠点としての地方創生を重視する思想が注目され、「三全総」において「定住圏」という概念が提示されてきました。定住圏という思想は、地方の衰退を止めるためには、「豊かな人の住まい」を創造していかねばならないという政策的な転換が行われてきたのです。こうした中で、「地方の時代」という潮流が起きてきました。政府としても、地方を見直そうという流れをつくろうとしましたが、それでも、都市への集中、特に、東京への一極集中は止まりませんでした。そして、小泉政権の時に、都市再生、地域再生という政策が打ち出されます。しかしながら、この政策においても、地方の再生は加速せず、結果的には、東京への集中を激化させていきました。

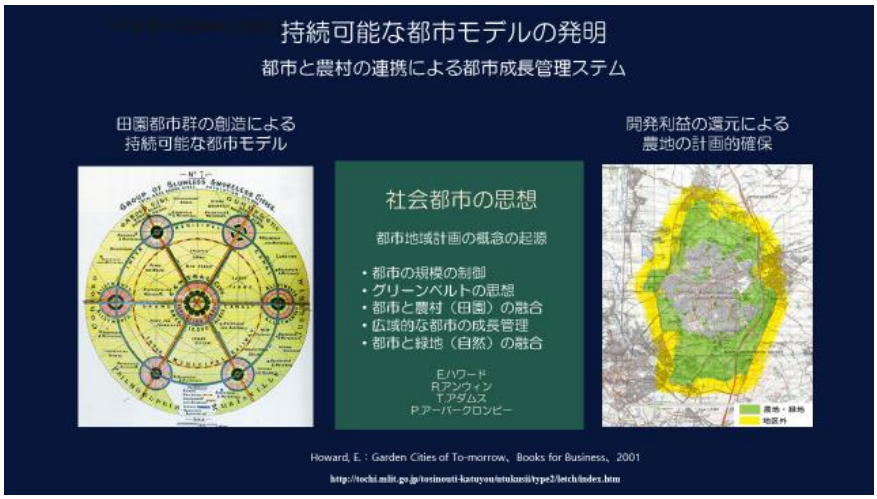
しかしながら、2020 年からの新型コロナウイルスの世界的な拡大によって、都市と地方の関係性が大きく変化してきています。デジタル環境の進化によって、様々な機能が大都市に集中する必要性は低下し、地方への移住の動きが加速してきています。これからの時代、我々は大都市に住む必要にあるのでしょうか。新型コロナウイルスの発生によって、自然が豊かな地方に住むことの価値が見直されています。「デジタル田園都市国家構想」も、こうした大都市の成長の限界と地方の魅力の再発見を再認識させる重要な政策となっていくでしょう。今、企業の本社が東京から地方に転出しています。地方が、しっかりとした受け皿を持てば、美しい自然の中で、住みやすい文化的な都市を創ることができるのです。今こそ、真の地方の時代がはじまると私は感じています。以上が、我々をめぐる、現在の都市の状況です。

それでは、次に「都市計画」の歴史的な系譜を見ていきましょう。日本は、都市計画と農村計画が別

になっています。国土交通省と農林省というように、省庁も分かれています。イギリスは、「都市農村計画」という概念があり、都市計画と農村計画を一緒に考える仕組みになっています。持続可能な社会を構築していく時に重要なことは、まさに、「都市と農村を一緒に考える」ことなのです。それでは、都市と農村で何が起きているのか。農村は自然が豊かで、国土の保全機能を担っています。里山、里海があり、我々の生活が成り立っているのですが、農村地帯では年々人が少なくなり、海では汚染も進んでいます。都市は経済が集中し、様々な活動が行われています。「集積の利益」という概念がありますが、多くの人が集まるところには、商売が成り立ちますね。それを「集積の利益」と呼びますが、東京のような大都市は、世界中をみても多くはありません。都市には、超高層が立ち並び、郊外に残された田園も住宅地に変えられてしまいました。都市に人口が集中し、田園には人がいなくなる。この構造をどのように変えていくことができるのか、これが、長年の都市計画の課題となっています。そして、こうした課題を解決するために、エベネザー・ハワードが登場します。ハワードは、20 世紀初頭に、田園都市論を提唱しました。私は、建築を学びだした 18 歳の時にハワードの著書「明日の田園都市」に出会いました。ハワードの「田園都市」を読み進みながら、ハワードの思想に強く胸を打たれました。産業革命によって都市環境が悪化していたイギリスで、現在、重要課題となっている持続可能な都市のモデルとなる未来都市を提言したハワードの発想に感動しました。私は、「田園都市」は 20 世紀を代表する重要な発明だと思っています。なぜなら、ハワードは「都市を計画する」という概念を生み出した人なのです。そして、ハワードは「都市計画の父」のような存在なのですが、実は、建築家でも都市計画の専門家でもでもなく、速記者だったのです。ハワードは若い時から病弱で、ロンドンのセントポールの鐘が聞こえる都心で育ちます。「霧のロンドン」は産業革命の時代の大気汚染の産物であったという話もありますが、当時は、ロンドンの都市環境は劣悪でした。ハワードは、スティーブンソンが蒸気機関を発明したことに触発されて、「都市を発明する」ことを思いつきます。そして、彼の思想をまとめた一冊の本を書きます。しかしながら、この最初の本はあまり売れずに、数年後、改題し、「明日の田園都市 ：Garden Cities of Tomorrow」として刊行し、これが大きな反響を起こしていきます。その中に、ハワードの思想の根本でもある「三つの磁石」という概念図を示します。この概念図には、「都市」と「田園」の磁石があり、それらには長所と欠点があるが、両方の利点を持った「都市と田園」の磁石を創れば、人々は皆、そこに向かうであろうことを示した図となっています。これは、まさに、「コロンブスの卵」のように、都市の問題を解決する素晴らしい発想でした。「都市」は、経済が活性化し、仕事も多くありますが、自然は乏しく、家賃も高くなります。「田園」は、美しい自然には囲まれていますが、高賃金の仕事は少ない。ハワードは、こうした「都市」と「田園」の「両方の良い部分」だけをとり「田園都市」という新たな磁石を造ろうと社会に提起したのです。そして、ハワードは建築家ではありませんでしたので、建築家のレイモンド・アンウィンの協力を得て、田園都市の空間設計を具現化していきました。アンウィンによって描かれた田園都市の街区のデザインの原型はその後の都市計画に重要な影響を与えました。

皆様が良くご存知の「新富谷ガーデンシティ」の同心円状の街区デザインは、まさに、このハワードとアンウィンによって実現された構想なのです。美しい田園の中に、都市を規則的に配置したモダンな都市を創り、自然と親しむ生活を創造していくことが「田園都市」が提示した理想像でした。ハワー

ドは「都市と田園は結婚しなければならない」という言葉を残しています。ハワードは、「田園都市」の理念を「都市と田園の結婚」と表現するロマンチストでした。そして、この「喜びに満ちた結論から、新しい希望、新しい生活、そして新しい文明が湧き上がるだろう」とハワードは述べています。元来、集落は自然発生的なものでした。自然の中に自然発生的に道が生まれ、そこに、人々が共同体をつくり、教会を中心とした市街地ができてきました。ハワードは、こうした自然発生的に生まれてくる集落、ビレッジを超えて、美しい田園地帯に、計画的に土地を取得し、そこに、理想的なデザインを行い、新都市を創ろうとしたのです。まさに、「都市を計画する」という偉業を成し遂げた人物がハワードなのです。そして、ハワードは、こうした自然と共生する都市の発展モデルとして、田園都市が同心円状に連鎖する「社会都市」という概念を提示しました。田園都市の原単位は、中心に円形の都市部があり、その周辺にその5倍の田園地帯が囲んでいる扇形状の街区がひとつのユニットになっており、このユニットを連ねて、円形の環状都市を形成していくことで、美しい田園を残しながら、複数の都市が衛星のように連続したモデルを提案したのです。この広域的な衛星都市の連携モデルは、多くの都市計画の原型となっています。ロンドンやベルリンなどの大都市圏の構造は、こうしたハワードの影響を受けており、東京もこうした田園都市を一時目指しました。しかし、急激な都市化の中で、自然を保全することはできませんでしたが、ハワードが目指した田園都市の理想像は、美しい緑と都市は共存させていくべきだとする現代においても達成できない都市計画の究極的な目標でした。



ハワードの思想はこうして世界に伝播し、イギリス、フランス、ドイツ、オーストラリア、アメリカ、日本と様々な国の都市計画の政策に影響を与え、様々な新都市が建設されました。イギリスを訪れるとわかりますが、日本と同じ島国ですが、その中で、素晴らしい田園が国中に残っています。ロンドンのヒースロー空港に近づき、機内から眺めると、まさに、緑の絨毯を敷き詰めたようなところに、整然とした美しい街並みが調和し、目を楽しませてくれます。ハワードの発想した「田園都市」のアイデアは、世界中の都市のデザインに影響を与えていきましたが、どのくらいの人々がこのことを正確に理解しているでしょうか。私はそのことに感動し、それを多くの人々に伝えたくて、20年をかけて、「明日の田園都市」の解説本を書き上げました。

この写真は「レッチワース」という都市です。ロンドンから北に50キロ程の場所に立地する都市ですが、ハワードの思想を実現したい応援者が多く集まり、構想から数年で実現しました。市街地の中心には商店街が集積し、その外部には、同心状に住宅地が形成されています。そして、その外縁部には、この都市の運営母体である協会が計画的に田園を取得しています。都市と田園がセットなっており、

田園では、農作物を生産され、自立型の都市をつくるというのがハワードの思想です。ハワードの意味する「都市と田園の結婚」とは、都市と農村が共存し、自立するべきであるということです。大変シンプルなことですが、ハワードはそれを明確に論じました。この写真は、レッチワースの中心部の商業施設ですが、商業施設もコミュニティが主体で建設した上で、その開発利益を自らのまちづくりに還元しています。また、ハワードの構想の素晴らしいところは、都市の規模の抑制ということです。都市をどのくらいに制御するべきかという命題についても、ハワードは提案をしています。ハワードは、都市の周辺には必ず 5 倍の田園を配置させるとともに、その適正規模を提示しました。「グリーンベルト」という言葉を聞いたことがあると思いますが、この「グリーンベルト」という概念も実はハワードのアイデアです。ハワードは、都市が無秩序に拡大しないためにも、「グリーンベルト」を計画的に設けることが重要であることを示しました。ロンドンは、グリーンベルトでも有名です。ロンドンには市街地があり、その周囲には、広大な 25 キロ程のグリーンベルトがあります。ロンドンでは、日本とは違って、通勤費が支給されないため、グリーンベルトを越えた遠方に住むことは経済的にも負担があり、遠距離通勤はなくなり、グリーンベルトの存在により、都市の拡大も抑制されています。ロンドンがこうした優れた都市構造を有しているのは、かつてのロンドン市長がハワードの思想を基に「グレーター・ロンドン計画」という都市計画を立案し、それを確実に実行してきたからです。都市を発展させることは重要ですが、同時に、自然や田園を守ることが重要であると理解されたからこそ、実現できた都市モデルです。「田園都市」を実現するためには、エベネザー・ハワードだけでなく、建築家のレイモンド・アンウィンやトーマス・アダムス、パトリック・アーバークロンビーなどの様々な立場の専門家の協力が必要でした。そして、こうした専門家の思想を実現していくためには、この田園都市に住む人たちが一緒になって理想都市を創る必要がありました。また、レッチワースにおいて注目すべき重要な点は、田園都市は、都市開発であると同時に農業の維持を重要視しているところです。これはまさに、今、富谷市でも進められている「地産地消」の概念です。レッチワースにおいても、「とみやど」のように、地域の中での循環を生み出そうとしています。

　ハワードは、田園都市株式会社を創設し、土地を開発しながら、その開発利益によって商業地の整備や広報、田園の自然環境保全を進めていきました。ハワードの田園都市は、こうした都市デザインだけでなく、都市経営のモデルの提示でもありました。レッチワースは、当初の敷地規模は、1500 ヘクタールから始まりましたが、その後、1800 ヘクタールに拡大し、計画人口も 3 万 2 千人になりました。中心には、商業施設、住宅、公園があり、外縁部には農業地帯もあります。こうした都市機能が同心円状に配置されており、その街区のデザインが、新富谷ガーデンシティにも取り入れられています。日本では、他にも、東京の田園調布もこうした同心円状の街区デザインとなっており、同じく、ハワードの思想に基づくものです。田園調布は、「論語と算盤」で注目を集めている渋沢栄一が「田園都市株式会社」を設立し、その四男である「渋沢秀雄」が欧米の田園都市を学びながら、建設した住宅地であり、

「田園調布」や「田園都市線」という名前にその影響が現れています。こうして、世界中に影響を与えた「田園都市」ですが、富谷市に、ハワードの思想が伝わってきているという事実には、大変、深いご縁を感じます。私は、宮城に赴任し、若生市長とお会いできましたことをまさに運命と感じております。本日、こうして長年研究してまいりました「田園都市」について、富谷市でお話させていただくことを大変嬉しく思っております。ハワードの理念の中で重要なもうひとつの概念は「コモンズ」というアプローチです。レッチワースは田園地帯に、アンウインが都市設計を行っていきますが、住宅地の中に住民の「共有の庭」を設置していきます。これらは、イギリスでは、「コモンズ」と呼ばれるコミュニティガーデンとなっており、住民の中で管理していく共有財産としての自然になります。ハワードは、1902 年に「明日の田園都市」を発刊してから、数年という期間でレッチワースを実現していく機会を得ます。この成功の背景には、ウィリアム・モリスという素晴らしい芸術家がハワードを応援してくれたことがあります。ハワードは著書を発刊してから、街頭で演説をしている姿が残されていますが、モリスがその思想に賛同してくれたことで、急激に人々の支持を集めることができました。そして、アイデアだけではなく、実際に素晴らしい住宅地を創り上げることができました。イギリスでは、日本と異なり、土地は借地になっています。英国においては、土地はすべて女王の所有であり、このことが、土地に対する意識を醸成しており、都市や土地についても、個人の財産という意識は薄く、街並みを公共的なものとして意識する背景になっています。また、イギリスはビートルズやローリングストーンズの国です。イギリスでは、広告等にも厳しい規制があり、伝統的な街並みが残っています。こうした古典的な風景や歴史を愛すると同時に、音楽や芸術では革新的なものも受け入れることが、イギリスの特徴となっています。このような伝統の中で、自然景観や歴史的景観をどのように保つのか、それを住民で考えてきたという土壌があります。そして、もうひとつ、田園都市の素晴らしい点は、開発利益をコミュニティに還元する仕組みです。住民が協力し、様々なまちづくりを主体的に行い、持続的な都市経営の仕組みをつくっているということです。また、田園都市は、地域エネルギーについても先駆的な提言をしており、「社会都市」の概念図では、衛星都市を結ぶ交通網は水路となっています。また、田園都市の中には、小水力の発電所も構想されており、エネルギーの自立も目指した「自給自立都市」をしっかりと描いていました。以上で、ハワードの構想の先進性をご理解いただけたと思います。

皆様には、今こそ、都市計画を学んでいただきたいと思います。私は、現在、富谷市の総合計画審議会の会長として、総合計画の策定に携わらせていただいております。総合計画は、自治体として最上位の計画です。富谷市の未来をどのように創っていくのかを決めていく重要な計画です。都市計画もその方針に基づいて創られています。それでは、「計画」とは何でしょう。最後に、このことについて考えたいと思います。全てのものには計画があります。そして、人類の歴史は計画によって創られてきたと申し上げたいと思います。人間は常に計画をつくる衝動を持っています。計画なしに動くこともあるとは思いますが、多くの人は、何かをするときに「計画」を立てます。例えば、今度の日曜日どこに行くのか。「とみやど」に行くのか、どこに行くのか考えます。ですから、人間は計画する生き物であり、これは、人間活動の根幹をなす重要事項です。ならば、計画とは何かを知る必要があります。「計画」とは、問題解決に向けた一連の行動やデザインである、ということができます。つまり、計画には

常に目標があり、それをどのように達成するのかを考えることが計画であり、人間はそれを積み重ねてきて、現代を創ってきました。

そして、都市をどのように創るかについては、「フィジカル」と「ノンフィジカル」という側面があります。空間的な側面と社会経済的な側面です。例えば、学校の形をどのようにつくるかという空間的な視点と、どのように運営するかという仕組みの視点があります。また、計画を考えていく上で重要な視点は、「ホリスティック」という視点です。自然や都市というシステムは、全体が複雑につながっており、一つのことを動かすと、一見無関係のところに影響が出てきます。例えば、蜜蜂が少なくなると、自然が破壊されていくといったように、部分と全体が関連しあうことを熟知し、常に部分を全体性から考えていく「ホリスティック」な視点が重要になってきています。そして、都市づくりの上では、富谷市だけではなく、周辺の関係をどのように考えるかという広域的な計画が重要になります。それが、「都市計画」の上位にある、「地域計画」にというレベルになります。また、SDGs の時代の到来の中で、「経済」、「社会」、「環境」、この三つの問題を同時に解決するソリューションを探さなければなりません。そのためには、持続可能な都市の発展と制御を実現するバランスのとれた計画が必要になります。今、富谷の未来を考えていく時、地方創生戦略の未来を見通していく必要があります。東北は、東日本大震災から 10 年の節目を超えて、持続可能な都市の先端を走っていくにふさわしい地域と言えます。そして、富谷市には、美しい自然が残されており、新富谷ガーデンシティがあり、志の高い市民が集っています。建築家は、空間をデザインする視座を持っており、都市計画家は、建築から都市、地域から地球に向けた視座やスケールを持っています。都市計画家は、空間的なスケールを縦軸におき、「フィジカル」と「ノンフィジカル」の視座を横軸において、空間と社会の織りなすプロジェクトを創造していきます。「とみやど」においても、こうした空間的な視座と社会的な視座の多元的なアプローチによって、地域を創生していくチャレンジと言えます。富谷市は、これからも、こうした多元的な視座と多様なステークホルダーとの共創によって、新しい未来を創造していくことでしょう。皆様には、是非、都市計画の視点を持っていただき、土地利用や交通、エネルギーや都市環境といった、都市を支える様々な計画に参加いただきたいと思っております。富谷市にとって、これから重要となることは、総合計画と都市農村計画を一緒に考えていくことです。今は、都市計画と農村計画は別々ですが、是非、皆様には、「田園都市」の思想を理解していただき、都市と農村をどのように一体的に計画していくのか考えていただきたいと思います。これこそが、世界中の都市の未来トレンドとなっています。また、環境政策についても考えていただきたいと思います。我々は、持続可能な社会を実現し、次世代を担う子どもたちにバトンを渡さなければなりません。この 21 世紀の初頭に、20 世紀の負の遺産である環境問題を解決する仕組みを創らなければなりません。そして、その際、大事なのは、地域特性の尊重です。持続可能な都市とは、その地域の魅力や

特性を最大限に活用した計画から生まれます。我々は、多くの先進都市に学びながらも、富谷市ならではの未来を創らねばなりません。そして、そうした未来を実現するためには、地域主体の計画策定を進めていくことが重要になります。本日の会は、まさに、そのための場であり、総合計画の策定においても、是非、積極的な市民参加をお願いしたいと思います。そして、最後は、広域行政の視座です。富谷市の持続可能な未来は、富谷市だけでは実現できません。仙台市や富谷市の周辺自治体との広域的な連携が必要不可欠となります。まさに、ハワードが提示した社会的に都市が連携する「社会都市」の思想を実現していく必要があります。私は、こうした都市の未来を市民が主体的に考えていくことが、地球環境問題を解決していく根源的な力になると考えています。

本日、この後、富谷市の未来についての様々な議論があると思いますが、皆様が富谷市の未来を担う中心であることを忘れないでいただきたいと思います。これまで、地球上でたくさんの都市が誕生し、その多くは、滅亡や衰退をしてきました。しかしながら、都市を計画するという素晴らしいアイデアは今後も続いていきます。本日、お話しましたように、「人間は計画する生き物」なのです。我々は、様々な問題を計画によっては解決し、未来を素晴らしいものにしてきました。富谷市の偉人である内ケ崎作三郎先生が生きられた、約 100 年前の時代は、まさに、ハワードが「田園都市」を構想していた時代です。こうして一世紀を超えて、世界に広がってきた「ガーデンシティ」が息づく富谷市で日本のこれからの新しい都市モデルが創られていくのも、まさに、運命的なものを感じます。今こそ、富谷市を愛する皆様の力が結集し、富谷市の未来を共に創造していく時期が到来しているのです。本日は、そうした富谷の持続可能な未来に向けた議論ができればと願っております。

ご清聴、ありがとうございました。

意見交換

参　加　者①

最初の田園都市と聞いただけで何となくすごく難しいことをお話するのかなと思ったら、意味から教えていただいて、すっと入ってきました。都市と農村と一緒に計画するのが良いのだというところが、何となく私の中に感覚的に入ってきました。私、蜜蜂を育てる前に山のほうに入らせてもらって、その時に山の木とか自然を生で感じてすごく癒されたというか、そういうのがありまして。その後に蜜蜂を飼った時に、蜜蜂を通して自然と花と草木を知ることになるのですね。蜜蜂を知ると花を知ることになって、その自然をまた感じることができてというので、今それを継続するために、蜜蜂を育てるために、蜜源というところで緑豊かなこのまちを蜜蜂を通したその視点、感覚でずっと維持できたら良いなという風に、来年は富谷市全体を花と緑豊かな自然を共存できるようなまちをつくっていきたいなという風にすごく感じているところです。

ファシリテーター

田園と農村を一緒に計画するということで、ご自身でやられていることと何となく重なってきたというふうなお話だったと思います。

参　加　者②

田園都市ということですごいテーマだなと思っていたのですが、私は人間が生活する上では、やっぱり都市というのは緊張する場所ですよね。緊張するところとゆとりのあるところがどうしても必要だと思うのですよ。しかも今はこういう風に開発が進んでいまして、ある程度自然が多いところであっても、子どもは今、自分の身近な川にどういう生物が住んでいるか、小魚が住んでいるかというのを全然わからないし、山に行くとどういう植物とか生き物がいるかというのをほとんどわからないのですよ。そういうことを体験できるというか、身近に感じられるような都市と自然の場所、それをうまく調和したつくりが必要でないかと私は思っています。

ファシリテーター

まさに今も都市は緊張するところで一方ゆとりのある場所が必要なのだということ、開発の一方で子どもたちが遊べるゆとり、キーワードとなる生態系とか植物などがいなくなっていると、その調和がキーワードだというお話をいただいたと思います。

参　加　者③

田園都市ということで私自身このテーマで興味を持って考えたことは今までなかったのですけれども、私自身小さい頃に自然体験とかあまりしたことがなく、何かこう都会だから良いみたいな単純な考えのもとで今まで育ってきたのですけれども、今富谷にやってきて、それこそ養蜂だったり蜜源づくりの畑とかに携わらせていただいて、私なりにもっともっと早くこの体験が子どもの頃にできたら、また違った考え方ができたのではないかと、個人的にまだまだ始まったばかりの活動ですけれども感じていて、そういう風に感じた際に、私自身教育に携わらせていただいた経験があるのですけれども、子どもたちにどのような経験だったり、教育をしていけばそういった思考につなげられるのだろうなという風に、そこのゴールはまだわからないのですけれども、風見先生の話を聞きながら考えるきっかけになりました。

参　加　者④

私、お話聞いたときに、やっぱりそういった都市と田園というのが融合するとすごく良いなと思ったのですけれど、そのためには三つ課題があると思いまして、一つは土地の問題、私も西成田の一軒家を借りているのですけれども、相続がうまくいっていない。本当は開発したい、借りたいのですけれど

も、おじいさんが相続していて、そうすると地権者が４００人とかになってしまうと。本当はその人たちの地域でやりたいのだけれども、相続がうまくいかなくて、結局開発ができないみたいな問題があるので、相続のことと。あとは日本の場合、農地と宅地の問題があるので、農地に家とかは建てられない、だからそういう特区とかにしない限りはなかなか難しいのかなと思う。逆にそこが解決できれば、そこでは住民の方とか役所の方とか、皆が協力しないとなかなか難しい。逆にできれば、そういうことが進むのではないかなと思います。二つ目はデジタルの対応で、今 Z 世代と言われる人たちは Wi-Fi 必須なのですよね。逆にどこでも Wi-Fi さえあれば若い人は来てくれる。私が知っている宮城大学の学生は、Wi-Fi で大学の授業を釣りしながら受けていると言っていました。そういう感じで多分今の世代は変わってきているから、Wi-Fi は絶対必須なのだろうなと。あとは新しく来た人と地域の方をつなげるコンシェルジュ機能が無いとなかなか昔からある土地の人に入っていくハードルになってしまうのではないかなと。そういう機能があると、田園都市が進んでいくのではないかなと思いました。

ファシリテーター

今、具体的にこの地区で活動をしているということで、土地の問題の話。デジタルの対応。釣りをしながら授業というのは面白いですね。釣りをしながら授業というと、どんなことが出来るだろうか、楽しく想像を膨らませながら、お話を伺っておりました。すごい時代になってきましたね。また、つなげる役割ということで、先ほどハワードの絵でも磁石というものが出てきましたけれども、それに引き寄せられるという場合もありますし、何かマッチングする機能も重要であるということを気づきとして、お話いただきました。

参　加　者⑤

私、今成田で勝手にやっている町内会みたいなのを町内会の方々の教えを受けながら、人が集まる場所を１０年位前から町内会館でやっているのですが、成田五丁目会館というのはせせらぎ緑道沿いにありまして、引っ越した２０年位前は木も小さくてまだはげ山のような感じだったのですが、この頃桜は咲くし、紅葉は散るし、もう鳴子に行かなくて良いよねと言いながら散歩しているのですが、やっぱり地域に愛着を持つことが住民目線での田園都市というところなのかなと感じています。その愛着を持つ一つはやはりチームワーク、人のつながりで地域に愛着を持つ、そして豊かな自然を愛するということですね。西コミで行事をやることもあったのですが、コロナでしばらくお休みしていますが、やっぱりここはとても気持ちよくて、家からちょっと車でやってくればこういう場があるというのはすごくありがたくてですね。やっぱり富谷に住んで良かったなと日々思っております。２０年経って今困っているのは、最初、家の生け垣にレッドロビンを植えるというのが一応決まりだったのですけれども、ロビンは下のほうが枯れてくるし、結構近所の家でも全部切って、フェンスに。やっぱり年齢とともにまめに切るというのが大変になってきて、フェンスに変えているお家が結構出てきているのですが、何か残念だなと。生け垣を残してと言いたいのですが、今私がとても知りた

いのは、自然豊かなまちであるためにレッドロビンに代わる持続可能な生け垣を提案していただけるとありがたいなと思っております。

ファシリテーター

非常に魅力的なキーワードをいっぱい出していただきました。勝手にやっている町内会とか、いいですね。住民目線での田園都市とか、それが愛着につながるということでした。本当に皆さんの気持ちが伝わってきます。生け垣がフェンスに変わっていくということ、仕方ないとは思いつつ、残念だなという思いですよね。その辺の部分は、まさに行政と一緒に考えていくところかと思いますので、具体的な議論が進んでいければ良いのではないかと思います。

参　加　者⑥

今日は農家代表ということで参加させてもらっていると思います。田舎に住んでいて、田舎が当たり前になってくると田舎の魅力は薄れていくのだろうなと思うのですけれども、逆に私は東京に２年勤めたことがあって、やっぱり東京にいる時に思い出すのですよね、実家の緑とか。そう考えるとやっぱりその田舎の魅力がすごく強いのだなということをすごく身をもって実感させてもらって、東京から帰ってきてから就農したので、そういう思いがすごく強いので、今回のテーマにすごく共感というか、先生のお話もすごく共感しました。実際に富谷塾とかでもプレゼンとかさせてもらって、いーとみやという食育のイベントをやらせてもらったのですけれど、１年をかけて、半年位かな。子どもたちに種を蒔くところから夏野菜を収穫して、カレーを作るところまで体験してもらうというイベントをさせてもらったのですけれど、子どもたちがすごく喜んで、本当に楽しそうに池で生き物採ったりとか、その辺走り回ったりしてすごく楽しそうにしていて、コロナで今休止にしていたのですけれど、最近また違う友人で興味を持ってくれる方がいたので、何軒か家族を呼んで体験的なことを月一位のペースでやらせてもらっているのですけれど。この間も家の裏でそり滑りしたりとかして、都会に住んでいる子どもたちって自然に触れたいなというところを潜在的に思っていると思うので、そこの調和がうまくとれたらなと思う一方で、農業やっている人たちの温度差みたいなのは感じてしまいます。例えば地産地消もそうですけれども、実際、畑を見ても田んぼしかないのですよね。富谷市民だけで収まるかといったら多分収まらないので、違うところにも出してしまっている。だからもっと野菜をいっぱい栽培できるようにして、富谷の中で回すような仕組みまでこぎつければ素晴らしいなと思うのですけれど、全体的な生産者も少ないですし、そういったところの課題はこれから色々解決していかなければいけないのかなという現場の意見です。

ファシリテーター

本当にそうですよね。現場の感想、所感が重要になってきて、温度差であるとか。温度差が無いというまちは、実際には皆無ですので、そういうことを率直に話すことが重要なのかなと思います。

参　加　者⑦

私、４７都道府県のうち４１か所に旅行とか仕事で回ったことがあって、自分自身色々な所に住んで、仙台に初めて来た時に仙台は定禅寺とか木が生えていて結構きれいな街なのだなと思うことがあって。実際に家を建てる時にどこにしようかなという時に、成田とか土地を見に来た時に景観がきれいだなと思ったのが最初だったのです。それで私自身が徳島のすごい田舎で育って、景観、田んぼの中に家があるみたいなところで育ったので、作られた街並みというものに結構憧れがあったのですね。景観を見に行って、実際成田に住んでというのがあって。今日の話とリンクするところもあって良かったなと思うのですけれども。ここでは問題ではないかもしれないですけれども、私が住んでいる徳島県だと田園都市というか、大学自体が無いので、せっかく都市をつくっても皆さん１８歳で県外に出てしまう。帰って来る職場も無いからそのままというのがあるので、こういう田園都市というのが、全国にもっと広がったら良いなとすごく思いました。かつ田園都市と一緒にセットで考えなくてはならないのが、公共の施設とか学校というのがすごく大事なのではないかなと聞いていて思いました。

ファシリテーター

４１都道府県に行ったというのはすごいですね。ぜひそういう色々な所を回ってきた知見をまちづくりに生かしていただければと思います。

参　加　者⑧

特に田園都市というのは今まであまり考えたこともなかった例題だったのですが、この話を聞いた途端に私の少ない知識が限界集落状態になりまして、何をどんなふうに答えたら良いのかなと戸惑いもちょっと感じました。しかし講義の中で、自然と集落の共存、それから大都市の成長限界というのがあったのですけれども、この言葉を見た時に富谷というのは一見土地が非常に広いように見えますけれども、実は周りはほとんど大和町に囲まれて、あとは利府町と接しているというような本当にこじんまりした土地しかない状況です。人口も今５万２千弱でこれ以上本当に増えるのかなという状況の中で考えた時に、市街化の制限と言いますか、やはり土地開発というのは進めなければいけないと思うのですけれども、すでに行政のほうでは５か年計画位で都市開発計画というのは出来上がっているとは思うのですが、やっぱりある地域はもう手を付けないよと。古いまま残しましょうというような部分を早期に色分けして、それを残しつつ開発して新しい人を受け入れる形にしていくのも一つではないかなと。それから先ほど農業されている方から出ましたけれども、やはり農業の後継者というのが非常に少なくなってきています。それで富谷で全ての農作物やら、持続可能な食べ物を全て生産するというのは困難ですので、やはりここはちょっと足を踏み出して、大和町とかあるいは大郷、大衡の隣の町村との融合と言いますか、それを図りつつ、ここは富谷では作れるけれどこれはあまり作らないよという、生産の産業の分業化という表現が良いのかどうかわかりませんけれども、そういうものを行政のほうで考えていただければ、もっと富谷の生活そのものが楽しく回っていくかなと。あと

子育てのほうも色々な意見が先ほど出ましたけれども、全くその通りだと思います。

ファシリテーター

限界集落というお話もありました。成長から成熟、定常型社会と言われてきた中で、それを踏まえたまちづくりも必要ではないかというお話は重要だったと思います。都市計画のマスタープランであったり、広域連携であったり、多様な視点から話題提供をいただきました。

参　加　者⑨

私はこちらにご縁があって来て、定住し始めて１０年ちょっと経つのですけれども。私は超都会っ子で、東京の下町生まれで母も祖母も皆東京の人みたいな所から来ました。こちらに来た時に何が一番やりたいかといったら、農業をやりたいとちょっと思ったのですね。その時に某市に相談しに行ったら、女の人は結婚しているの、駄目だな、嫁さんにならないとなかなかと言われて。こんちくしょうと思って、まちでやっているレクリエーション農園を借りて１０数年耕していたのです。本当にそれが挫折しそうな時もあるのですけれども、まず本当にこっちに来て緑に触れるようになって本当にすごく楽しいのですね。その田園と都市みたいな融合という話だったら、できることなら私の家の裏に畑が欲しい位で、何かもうちょっと密接したところに、そういうのがあるとなお良いなと思いながら、本当に畑をやるとはすごいこと、農家の方に私が最初に農業をやりたいと言った時に、申し訳ない位に大変なことなのだけれども、大変重要なことだと思いました。かと言って、ここの生活にすべて満足しているというわけでもなく、実は東京に帰ると東京も東京で良いのです。やっぱり情報がすごく多くて、欲しいものが選べるような感覚というのがあるのですよね。また別な住み分けだと思うのですけれども、こちらには無いものが向こうにはあって、向こうに無いものがこっちにはあるという。やっぱりその行き来する時の喜びというのですかね、家に帰るのも良いし、こっちに住むのも良い。やっぱり先ほどの話なのですけれども、良いとこ取りみたいなところをうまく作っていけるとより豊かな生活ができるのではないかなと先生の話を聞いて思いました。

ファシリテーター

まさにご自身で田園と都市を行き来して、それぞれが持っている魅力を結びつけることが重要ということですね。本日の風見先生のお話とつながっていくのではないかと聞いていて思いました。

参　加　者⑩

私は先ほども言いましたように６０歳を過ぎておりますけれども、色々な経験させていただいておりますが、チコちゃんに叱られるかもしれませんがぼうっと生きてきたものですから、こういうテーマを与えられてなかなか困ってしまうところがあるのですけれども。私が小学校の時に富谷村から富谷町になって、当時の人口が５千人位、今は５万人ということで１０倍になっております。当時ここにいた人たちは新しく団地に住んできた人たちのことをインベーダーと言っておりました。侵略者です。私たちのことを原住民と呼んでおりました。でもその引っ越してこられた方たちは前に住んでいる土

地の良いところをいっぱい行政のほうに言って変えてほしいとかこうしてほしいと出したことが、今の富谷につながっていると思います。ですから色々な方、ここの参加者の方も素晴らしいメンバーなので、これから色々情報交換させていただけたら大変助かるのですけれども。こういった人たちの意見があって富谷が成り立っているので。特に都市整備の部分についてはかなり進んでいるのですが、農業については後退している部分なのですね。私も農協にいた時、市長の家のブルーベリー農園とか担当したので、その頃、富谷で何かと言うと、ブルーベリーの摘み取りがすごく有名だったのですよ。その後、蔵王とか鳴子とか色々な所で出てきたのですれども、富谷が先駆けてやった部分があって今の状態になっております。ただ、今農地のほうは大変深刻な問題でして、その後継者がいないとか。農地の見えるところは新しいのですけれども、この坂のほうは減反というか作物を作っていません。荒れ地になっております。そこで蜜蜂のほうをやっていただいている方もおりますけれども。そういう状況の中にさらに追い打ちをかけているのが猪です。今泉でも今度猪の柵、防御柵、ネットを作ったのですけれども、４キロを設置したのですけれど、トータルにすれば今富谷の中でそういうネットは１００キロ近く設置しているのではないかという位かなり進んでいる状況の中で、この後継者がいない、農地をどうやって守るかという部分の中の一つの問題にもなっております。農家の人は腰重いのですよ。何かやろうと言ってもなかなかやってくれない部分がありまして、先ほど私が言ったように西成田地区のコミュニティ推進協議会で、地元の米を使ったお酒を造りたいと提案したのですけれど、誰も参加してくれなくて、結局今四季学校という別なメンバーでやっているのですね。それを私たち六つの町内会でやりましょうと言ったのだけれども、なかなか向いてくれないということがありました。そういう農地を維持するのも大変なのですけれども、移住された団地の方々と地元の農家の人たちが交流できる場所をもうちょっとこれから増やしていければ良いのかなと思います。貸し農園があるし体験農業とか色々ありますし、稲刈りとか田植えとかそういった手伝いが欲しい部分もありますので、それを体験という形で協力していただければすごく助かるのかなと思います。あと私は旅行をやっていたので、先ほど日本全国４１都道府県と言いましたけれども、私は４７都道府県全部行きましたけれども。４７都道府県、あと３か所だけ泊まったことがないのです。だから４４都道府県泊まってはいるのですけれども、一般的な有名な観光地しか行かないので、テレビでもやっていますけれど、有名観光地の隣の町は知られてないのですよね。そういった部分というのは今デジタル化とかテレビでいっぱい紹介されているので、新しい観光のルートが出来てきているし、団体旅行ではなくて小グループでの旅行が最近多いので、富谷はそういった部分の全国区でなくても良いのです。宮城県の中で富谷は良いねと皆に言われるような情報発信をしていただいたら良いのかなと思います。今回はテーマが大きかったので、ここで答えは出せないのでこれからじっくりと勉強していってやっていきたいと思います。

ファシリテーター

富谷の成り立ち、富谷の発展の実際をお話していただきました。最後に、これはやはりテーマが大きいので、具体的にしっかり勉強する必要があるよねというお話もいただきました。冒頭お話させていただきましたけれども、この田園都市、国でもこれから実践が始まろうとする段階ですので、今日を起

点に、地域の皆さんでの意見交換を継続していただくことは重要だと思いました。

それでは風見先生より、参加者の皆様のコメントを受けて、今後のキーワードとなるようなことなど、お話していただきたいと思います。

ア ド バ イ ザ ー

皆さんのお話をお伺いし、とても和気あいあいとされていて、本当に素晴らしいと思いました。皆さんがそれぞれの思いで富谷を愛されていることが伝わってきます。地域を愛する人がいる限り、まちというものは魅力的になっていくものです。本日は、皆さんの意気込みを強く感じることができましたので、「田園都市」の理念が富谷市の未来のまちづくりに役立つことができればと思っております。最初に、（参加者①）さんが言われていた「花」について補足しておきます。「田園都市」を日本で最初に翻訳したのは内務省の有志だったのですが、その時は「Garden City」を「花園（かえん）都市」と訳し、「花にあふれた都市」と解釈したわけですね。実は、かつては、江戸を「Garden City」と評した西洋人がいました。江戸のまちは、植木が多く植えられており、西洋人は、その「花にあふれた都市」を見て、「Garden City」という言葉をあてはめたのでしょう。

また、（参加者③）さんがお話されていた、「どのように自然を体験していくべきなのか」という点についてお答えすると、実は、自然が少ないと思える都市の中にも「小自然」はありますし、「公園」は都市の中に自然を造形していったものです。先程、ご覧いただいたレッチワースでは、自然の地形を活かした住宅地を創っています。私も総合建設会社やシンクタンクのプランナーとして、様々なプロジェクトで自然共生型のまちづくりを実践してきました。長年、住民の方々が愛してきた原型の地形を残しながら、自然に尊重した住宅地を創造していきました。都市は、近代的な空間の創造も必要ですが、豊かな自然を体験する場所を残しておくことが重要です。住まいの近くに森があり、木登りができるような生活はそれだけで豊かなことです。先程、（参加者②）さんがお話されていたのは、「自然と人間が仲良く暮らせない」ということでした。そういう意味では、我々が都市に住むことは、大きな試みではありますが、自然を無くした都市に住むことは、人間の心理的な側面にも大きな影響を与えています。私の大好きな作家にジャン・ジャック・ルソーがいます。ルソーは「社会契約論」を書いた有名な思想家ですが、同時に、「エミール」という教育論も残しています。「エミール」の中で、ルソーは、子どもは社会的な自己が形成されていく前に、自然の中で十分に遊ぶことが重要であることを示唆しています。このルソーの思想や「エミール」は、私の教育論の原型になっています。私も、小学校に入る前までは、日が暮れるまで野原で遊んでいました。今は、学問を専門にしているので、勉強熱心だったのではないかと思われるのですが、いわゆる五教科には関心がなく、体育、音楽、図工の実技科目だけは熱心に取り組みました。その中で、特に、絵を描くことが大好きでしたので、やがて、そこから「建築学」に興味を持つようなりました。ルソーは、「自我」が社会的に作られる前に、「自然」と相対することが重要であると述べています。ル

ソーを読んで、まさしく、自分自身はそうした体験の中で自己を形成してきたと思いました。最近、よくみかける光景ですが、公園等で子どもが泥まみれになるのをお母さんが叱るようなことがありますが、子どもたちにとって、自然の中で泥まみれになるまで遊ぶことは、小さな冒険であり、お母さん方にとっては大変かとは思いますが、是非、子どもたちに泥まみれの体験をさせてあげてほしいと思います。実は、「田園」と「都市」というのは、言い換えれば、「自然」と「人間」ということです。「自然」と「人間」の関係性というものは、永遠のテーマと言えます。人間は自然から生まれ、自然から決して離れて生きることはできません。皆さんもご覧になっていると思いますが、スタジオジブリの宮崎駿監督も「風の谷のナウシカ」や「もののけ姫」等の作品で描かれていますが、自然との関係を断ち切って、人間は生きられないのです。いつの時代も自然は失われていきます。先程、（参加者⑥）さんがお話しされたように、やはり、農業はとても大事な要素になります。自然から恵みを受けながら、食べるものを自分たちが作るということは、人間が生きていく上での最高の「豊かさ」を感じる体験なのではないかと思います。ハワードは、まさに、そのことを感じたのだと思います。ハワードは、病弱でしたので、人々が、自然の中で美味しいものを食べ、健康に暮らすための都市を創りたいと願ったのだと思います。また、（参加者⑧）さんがお話されたように、「都市の成長をどう考えるか」ということも重要な要素になります。残すべき自然を尊重し、農村をいかに美しく創っていくかということが、これから農業を営む人々へのインセンティブになっていくと思います。若生市長は、スローフードに先駆的に取り組まれてきた方です。自然の中で人間がどのように生きるかを常にお考えになってこられ、「田園都市」の理念の重要性についても早くから注目され、こうしてお取り組みいただいていることと思います。我々は、今こそ、自然と人間がどのように関わるべきなのか、そのために、都市と田園（農村）がどうあるべきなのかを、議論していくべき時期にきていると思います。また、先程、お話しました「花園都市」という概念ですが、実は、イギリスのケント州は「Garden of England」と呼ばれており、まさに、「英国の庭」となっています。なぜ、このように呼ばれるようになったのかというと、ケント州は、ロンドンに近い田園地帯で、ロンドンに花を輸出しています。ロンドンという大都市とケントという美しい田園が近接し、支え合うことで、お互いが反映する関係となっているのです。ハワードは、「田園都市」の思想の中で、何かのために犠牲になるのではなく、お互いが良いところを出し合い、自立的に都市が成長する仕組みを創り、美しさを保たなければならないということを伝えたかったのではないかと思います。都市というのは、経済的な魅力によって「集中」が加速し、一度、暴走すれば、それをコントロールする手法を人間は持ち合わせていません。東京やニューヨーク等の大都市は、こうした制御を必要としている都市規模といえるでしょう。「田園都市」は、こうした都市の暴走を止め、自立的な都市を目指していくために構想された理想都市のモデルと言えます。まさに、21 世紀において、こうした自然と共生する持続可能な「理想都市」を実現していくことが私の夢です。「田園都市がなぜそこまで成功しなかったのか？」という疑問についてもお答えしておきたいと思います。レッチワースは、ロンドンから約 50km 程に位置しており、自立都市として成立するには、ロンドンからの距離が短かったということが要因にあります。本来、ロンドンへの通勤者（コミューター）が発生する距離ではなかったのですが、あまりに素晴らしい住宅であったため、ロンドンの通勤者が多く住むことになりました。それは、ハワードの願ったことではありませんでした。ハワードは、レッチワ

ースに住み、そこで、仕事をする、職住近接、地産地消、自給自足の都市を目指していたのです。そして、その時代に無かったものが、高度情報化社会です。世界的な高度情報化社会の潮流の中で、現在、サテライトオフィスやワーケーションという概念が普及し、ネットワーク環境が整備されていれば、どこでも仕事ができるという時代になりました。ハワードは「田園都市」を構想した際には、「産業革命」が起きていましたが、今、ハワードの生きた時代から、約 100 年が経過し、世界は「デジタル時代」となり、我が国でも「デジタル田園都市国家構想」が政府の主要政策に掲げられるようになりました。これからの時代は、地方を拠点にした様々なビジネスを発展させていけます。そうなれば、我々は、東京に住む必要があるのでしょうか。私は東京にも長く住みましたので、大好きな都市ですが、今は、地方で豊かに暮らすという選択肢が一番になってきています。

また、新型コロナウイルスの拡大は、東京から地方への移動を加速させています。今、首都圏では、湘南や軽井沢への移住が進んでいます。こうした新たな産業革命が起きている現在だからこそ、デジタル社会における田園都市が成立していくであろうと考えています。これからは、豊かな自然と共生する都市を計画的に創造し、美しい自然と文化的な生活が融合する「田園都市のライフスタイル」を実現していくことができます。こうした新たな結合を「リエゾン」と言いますが、これからは、様々な価値観のリエゾンによって、ハワードの夢が実現する時期が訪れてきたと思います。

私は都市計画家として、市街化調整区域における地区計画の先駆的な事例を進めてきました。都市の外縁部には、市街化を抑制する「市街化調整区域」という指定があり、これは、残された自然を無秩序な開発から防いでいるのですが、自然と共生する良質な計画を立てることで特別に許可を認めることができる、「地区計画制度」というものを適用し、自然と融合したまちづくりを実現できる可能性が生まれてきたわけです。現在の都市計画法は、規制が緩い部分があり、外縁部で田園地帯の乱開発が起きてきましたが、一律に規制するより、「地区計画制度」を活用し、自然と共生した素晴らしい住宅地を創っていくことができます。大切なことは、森や農業を守りながら、良質な計画を地区計画で創るという手法を学ぶことです。そのためには、行政、市民、企業が連携し、共に学び、未来を語り合うことが重要になります。子どもたちが自然と共に暮らすことで、この富谷をさらに愛してくれるような、場づくりを、皆さんが主体となり、始めていただければと思います。

私にとって、「田園都市」の理念との出会いはまさに人生における大きな驚きでした。「都市と農村は結婚しなければならない」というハワードのメッセージがあまりにもロマンティックで胸を打たれました。皆さんは、「富谷市」という素晴らしい自然に囲まれたた都市に住まわれているわけですから、是非、美しい田園都市を富谷から発信していただければと思います。

ファシリテーター

それでは最後となってしまいますが、どうしてもこれは聞いておきたいということがありましたらご発言の機会を設けたいと思います、いかがですか。

参　加　者②

このテーマと合うかどうかわかりませんけれども、今私たちは掘りつくして、燃やし尽くしているわけですね、色々な意味で、資源を。このまま成長し続けることができるのかととても危惧しているのですね。その辺りはどうなのでしょうね。

ア ド バ イ ザ ー

20 世紀は、大量生産、大量消費、大量廃棄の時代でしたが、21 世紀は、これらの生活習慣や産業構造を転換していく時代です。そして、世界では、こうした取り組みが既に行われており、日本でも、こうしたモデルを地域主体で構築すべき時期がきていると思っています。これからは、人口減少社会が到来していきますので、資源循環は特に重要になります。現在、「シェアリングコミュニティ」という概念が注目されていますが、社会的な財産や個人的な財産を共有していく時代が到来してきたということです。

近年、「カーシェアリング」という仕組みが広がってきました。最近は、自家用車を所有したいという人が少なくなってきていると言われています。そうした時代においては、資源を共有していくことで、お互いが豊かになる時代になっていくということです。農作物も地域で共有し、循環していく時代になるでしょう。地域の資源を地域で循環させるとともに、もちろん、素晴らしい製品は世界に輸出していけば良いと思いますが、地元での消費を促進することは、地域の持続可能性を高めていきます。「地域のものを地域で使う」ということができれば、ゴミは出なくなります。「もったいない」といった思想は、日本の古くからの文化です。物質は有限ですし、物にあふれた生活が豊かとは言えません。本当に素敵なもの、一生使えるものを持つことが、本当の豊かさです。こうした視点を、お子さんにも伝えていただいて、良いものを使うようにしましょう。そして、良いものは、代々使われます。江戸っ子たちも、家に伝わる暖簾（のれん）や法被を何代も使っていることが自慢だったのです。時代とともに、文化というものは変わっていきます。日本の伝統を思い返せば、わかりますように、日本には持続可能な社会が息づいていました。現在、こうした日本の伝統・文化を再評価する時が来ています。富谷市においても、東北の生活に根付いた富谷らしい文化を再生・創造していきましょう。

ファシリテーター

ありがとうございました。以上で意見交換は終了となりますが、あえて、取りまとめるようなことはせずに終わらせていただこうと思います。引き続き勉強していきたいという皆さんの気持ちが大事ですし、最後の発言にあったような疑問をさらに議論してもらえればと思います。開発の問題も、時を経て SDGs という形態となり、学生も必死に学び、考えています。ただ、なぜ SDGs で言われているような状況が生じているのか、その経緯は今の学生は知らないというか、実際にみてきたわけではないのです。ですので、こうした議論こそ、多世代で学べるようにしていきたいと私自身思ったところで

す。最後になりますが、有意義な議論となり、素晴らしい時間を過ごせました。それでは、市長より、感想をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

市長感想

今日は本当にありがとうございました。大変皆さんから素晴らしいご意見をいただきまして、ありがとうございました。そして何よりも風見先生、ご講話本当にありがとうございました。皆さんと共に田園都市というのを共有できただけでも、今日は大変大きな機会になったと思っております。この田園都市構想、先ほどお話がありましたように、ハワード氏が１００年以上前に提唱して、未だになかなか実現できていないところでございますので、時間がかかるものだと思っております。簡単に富谷が田園都市をつくれるものではないと思いますが、ただ皆さんでこうやって色々なことを、同じ方向を思い描くことによって、色々なものを解決していくことにつながっていくかと思っておりますので、そういう意味では皆さんと共に田園都市構想というものをもう少し時間をかけながら、色々意見を出しながら、そして一つ一つ解決していくことが、田園都市富谷の実現につながると思っております。最後に風見先生がお話されたように、まさに２０世紀は大量生産、大量消費ということで多くのものを失った世紀だと思っております。２１世紀は逆に今まさに新たな価値観が生まれてきたところでございますので、私は富谷の地理的利点も含めて田園都市を実現していければと思っております。引き続きご指導いただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。